

はじめに

国土交通省では、中心市街地活性化や高齢者等の健康な生活実現等の観点から、歩いて暮らせるコンパクトな都市づくりを推進している。このような都市づくりの重要な一要素に市街地内の広場等の公共的空間がある。国土技術政策総合研究所では、都市内の公共的空間が賑わいや交流の核として人々に活用されるよう、質的向上を図るための研究を行っている。（研究期間：平成26年度～平成29年度）

広場は、内部の空間構成だけでなく立地特性や周辺環境等の空間特性によって、その位置づけや利用のされ方も変わる。また、広場の有効活用に向けて利用状況等を評価する際には、来訪者の行動の観点や周辺のエリア特性の観点等の多くの側面からその機能を議論する必要がある。このように、一様な基準や標準的な設計手法が相応しくない対象であり、計画や設計の拠りどころとなるものが少ないことが現状の課題である。

そこで、本研究では、広場空間の「質」や周辺への波及効果をできる限り客観的に評価することにより、効果的な広場空間の形成手法を導くことを目指したものである。そのため、海外を含めた既往の知見を整理したうえで、国内の既存の広場での観察調査をもとにそれらの知見を検証し、広場空間創出の留意点を整理した。

まず1章では、広場の定義や評価の観点、設計上の要点を明らかにするため、既往の文献の整理を行った。1960年代以降、過度なモータリゼーションに伴う無機質な都市計画や、人間の行動欲求や感覚・空間認知を軽視したような都市空間設計に対する反省から、多くの文献で広場空間の重要性やその計画・設計における要点について述べられてきた。ここではそれらの概要を整理し、主旨のタイプごとに整理した。これらの情報を、以下の類型化や知見の検証等に用いた。また、国内での既存の広場について、地方自治体へのアンケート等をもとに、抽出・整理、分類、観測調査を行った。

2章では、地方において広場整備の検討を行う際に対象となる敷地・エリアの特性を理解するための類型化手法の整理を行った。類型化の観点として大きく立地特性と空間特性を挙げ、さらにそれぞれについて複数の尺度を提示した。これにより、立地、空間の両側面の掛け合わせにより、実際の特性に応じて広場機能を設定することができることを示した。

3章では、実在する広場空間と利用者の行動等との関係について詳細なデータを得るため、実験を伴う実地での観察調査を行った。まず、富山における調査では、テーブルや座席、高木植栽等を含む広場の構成要素の配置を変えることによる実験的な観察調査を行った。一方、町田における調査では、広場と周辺エリアとの関係についても明らかにできるよう、より多くの手法を用いた観察調査を行った。

4章では、前述1章の文献調査等による知見を、2章の類型化の考え方も踏まえつつ、3章の観測調査データを用いて検証した。これにより、滞留行動の質や時間の長さ、利用人数等の観点から設定された計14の仮説について立証がなされた。

5章では、前述の4章までの検証結果を踏まえて、広場空間を評価する際の観点を整理した。これらは、利用者の行動等に注目したものであり、複数のデータを組み合わせることも有効であることを示した。

6章では、前述までの空間的な計画・設計に関する知見を踏まえ、計画・整備・管理／運営に関する留意点を整理するとともに、実際に低未利用地の活用について検討する際に求められる流れについて例示した。

なお、これらの検討の中で、関係する専門家へのヒアリングを行った。その結果の概要を7章に示す。



